



衣川 正介

『生野銀山』

生野銀山にバスが着くと、そこにはすでにガイドさんが2名待っておられました。『少し時間が遅れているようなので、自己紹介は後にして2班にわかれてついて来て下さい。』ガイドさんが急かします。私は先頭グループに入りガイドさんの横で『金山草（かなやまぐさ）はどれですか？』と尋ねると、『あれです。右にある、見学坑道の出口の上です。』指さして教えて頂きました。『お正月飾りに使うウラジロとどこが違うのですか？』もう一つ質問しました。『金山草のほうが大きく、この時期（11月末ころ）には枯れるのです。ここではその辺り一面に生えています。』遠くから見えていても十分に理解出来ないなので、後で確認することにしました。

見学ルートは入り口から約1kmと聞きましたが、雨のためか足元がぬかるみ歩きにくく疲れましたが、江戸時代の作業風景を再現した人形とその説明はしっかりと見ました。

- ①『たぬき堀り』と言われる、鉱脈に沿ってやっと工夫（こうふ）一人が入れる幅と高さをもった場所で、採鉱をしている堀大工（ほりだいく）生野鉱山では下財と呼んでいたそうです。こんなに狭い場所では、体の大きな私には入ることも出来ません。
- ②『背負子（しょいこ）』掘り出した鉱石を背中の背負子に入れて運んだ。人形は二人も並んで立っていますが、低い坑道では腰を屈めて運んだそうです。
- ③『さざえ』さざえの殻に菜種などの油を入れて、携帯用のランプにしていました。
- ④『唐箕（とうみ）』深く掘り進めば進むほど風の通りが悪くなり酸欠状態を起こします。そこで、農作業に使っていた唐箕を回して風を送っていました。
- ⑤坑道へしみ出してくる水は竹や木で出来たポンプでくみ上げ、排水溝に運びます。
- ⑥背負子によって坑道の外に運ばれた鉱石は選鉱され、金槌や石臼で粉砕されました。

江戸時代を通じて鉱山技術の大幅な変革はなく、すべてが手作業で、採掘が進めば進むほど坑道が深く長くなり、採掘作業・運搬・排水・送風など全ての作業が困難になり、江戸時代の末期には全国的に鉱山は衰退しました。又、幕府が多額の運上金を要求したため、鉱山の設備改良に回せる資金が枯渇したことも衰退の一因です。

明治政府はフランスの鉱山技術者を生野銀山に投入し、機械化された最先端の技術でこの鉱山を立て直す努力をしました。最も重要なことは生野鉱山まで、輸入した機械を運搬する産業道路の敷設でした。そのため3年という短い期間で『銀の馬車道』が完成したのです。



金山草 1



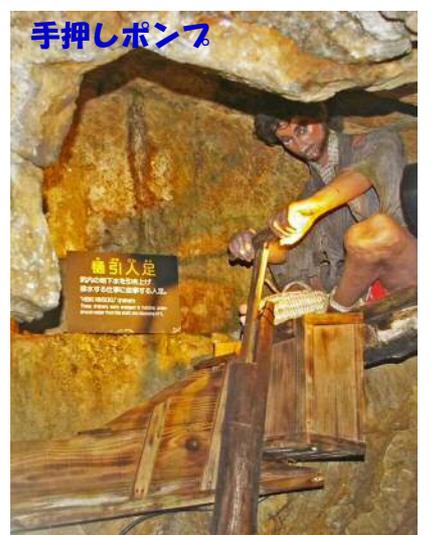
金山草 2



下財（げざい）



唐箕（とうみ）



手押しポンプ

『鉄のふしぎ博物館』

来て！見て！ふれて！ ふしぎ体感

鉄を見る目が変わりますよ。
ぜひお越しください。



黄銅鉱に
磁石がツイタ